

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

研究進捗状況報告書の概要

1 研究プロジェクト

学校法人名	東洋大学	大学名	東洋大学
研究プロジェクト名	社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源		
研究観点	研究拠点を形成する研究		

2 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本プロジェクトは、犯罪被害、被災、死別、病気、離別、経済的困窮など社会と強く関わる個人の経験を広く「社会的逆境」として捉え、こうした問題に対処しようとする人々の精神的回復・成長に焦点をあわせる。具体的には 1)精神的回復・成長をもたらす要因となる個人的・社会的資源の解明、2)それらの資源間の力動的相互関係の検討、3)個人や社会のウェル・ビーイングにつながるプロセスの解明、という3点を課題として研究・実践を行う。その意義は、ネガティブな状態からの回復に焦点をあててきた従来の研究に対し、回復を越えた成長を人間の「強み」ととらえ、その育成につながる資源について、単なる心理主義に陥らず家族やコミュニティなどの社会的資源を重視し、新たな観点から成長のプロセスを解明することにある。そのために散在する知見を集約し、比較文化的な視野も含め広く社会に成果を還元できる包括的な研究拠点の形成を目的とする。

3 研究プロジェクトの進捗及び成果の概要

本プロジェクトでは、平成25年度の活動開始以来、1)社会的逆境に関する大規模調査を実施することで逆境に対する心理的対処の種類ごとの様相を明らかにし、今後の研究の基礎的資料を得たこと、2)この調査の一部を韓国においても実施し、比較文化的な視点から分析をおこなったこと、3)若手研究者の養成を目的として、共同シンポジウムやセミナーを日韓両国で開催し、その成果が国際学会等で発表される予定であること、4)生態学的妥当性を高める経験サンプリングや脳機能の測定に関して、機器の導入や技術的問題に関する理解を深めて今後の研究に役立てる体制が構築されつつあること、5)社会心理学や社会福祉学に関連する諸領域の研究者との交流を深め、比較文化的、歴史的な分析を行う視点を得たこと、6)新規の研究員を新たに迎えて社会的逆境の種類をカルト被害に拡げ、海外より専門家を招いて被害防止の社会的資源について検討し、これと並行して高校生を対象に調査を実施したこと、などの点で現時点までに十分な成果をあげており、研究拠点の形成、および社会的逆境からの回復を促進する資源のモデル化という最終目標に向かう体制が整いつつある。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

**平成 25 年度選定「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」
研究進捗状況報告書**

- 1 学校法人名 東洋大学 2 大学名 東洋大学
- 3 研究組織名 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター
- 4 プロジェクト所在地 東洋大学白山キャンパス(〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20)
- 5 研究プロジェクト名 社会的逆境後の精神的回復・成長をもたらす個人的および社会的資源
- 6 研究観点 研究拠点を形成する研究

7 研究代表者

研究代表者名	所属部局名	職名
安藤清志	社会学部	教授

- 8 プロジェクト参加研究者数 23 名

- 9 該当審査区分 理工・情報 生物・医歯 人文・社会

10 研究プロジェクトに参加する主な研究者

研究者名	所属・職名	プロジェクトでの研究課題	プロジェクトでの役割
安藤清志	東洋大学 社会学部 教授	総括・社会的逆境からの回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
大島 尚	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する認知的変容の分析	回復・成長モデルにおける認知的資源の検討
堀毛一也	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長に関連する強みとウェル・ビーイングの結びつきの検討	回復・成長モデルに基づく強みとウェル・ビーイングの関連の検討
久保ゆかり	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する発達的変容の分析	回復・成長モデルにおける発達的資源の検討
戸梶亜紀彦	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する感情的変容の分析	回復・成長モデルにおける感情的資源の検討
西野理子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する家族資源の分析	回復・成長モデルにおける家族資源の検討

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

山本須美子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会病理的資源の分析	回復・成長モデルにおける社会病理的資源の検討
須田木綿子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会経済的資源の分析	回復・成長モデルにおける社会経済的資源の検討
加藤 司	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長に関するストレス要因の分析	個別事例による回復・成長資源の抽出
水野剛也	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長過程につながる育成メディアの検討	回復・成長モデルに基づく育成メディア構築の検討
小澤康司	立正大学・ 心理学部・ 教授	震災被害者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
西田公昭	立正大学・ 心理学部・ 教授	カルト脱会者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
松井 豊	筑波大学・ 人間総合 科学研究 科・教授	震災援助者の回復・成長に関する質的研究	個別事例による回復・成長資源の抽出
大坊郁夫	東京未来 大学・モチ ベーション 学部・教授	社会的逆境からの回復・成長に関連する強み育成技法の検討	回復・成長モデルに基づく強み育成技法の検討
角山 剛	東京未来 大学・モチ ベーション 学部・教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する職場資源の分析	回復・成長モデルにおける職場資源の検討
福岡欣治	川崎医療 福祉大学・ 医療福祉マ ネジメント学 部准教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関するソーシャル・サポートの分析	回復・成長モデルにおけるソーシャル・サポート資源の検討
谷口尚子	東京工業 大学・社会 理工学研究 科・准教授	社会的逆境からの回復・成長の促進につながる政治制度の検討	回復・成長モデルに基づく政策提言の検討
桐生正幸	東洋大学 社会学部	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会病理的	回復・成長モデルにおける社会病理的資源の

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

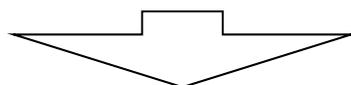
	教授	資源の分析	検討
尾崎由佳	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する個人的強みの分析	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討
鈴木規子	東洋大学 社会学部 准教授	社会的逆境からの回復・成長の個別事例による回復・成長資源の分析	個別事例による回復・成長資源の抽出
松田英子	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関するパーソナリティ要因の分析	回復・成長モデルにおけるパーソナリティ要因の検討
山田一成	東洋大学 社会学部 教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する社会意識の分析	回復・成長モデルにおける社会意識の検討
堀毛裕子	東北学院 大学教授	社会的逆境からの回復・成長過程に関する強みとウェルビーイングの分析	回復・成長モデルに基づく強みとウェルビーイングの関連の検討
(共同研究機関等)			
崔訓碩	成均館大 学校教授	悲嘆の表出に関する日韓比較分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討
李柱一	翰林大学 校教授	ジャーナリストの惨事ストレスに関する日韓比較分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討
黄昭淵	江原大学 教授	近代日本文学作品に見られる社会的逆境の分析	回復・成長モデルにおける文化的要因の検討

<研究者の変更状況(研究代表者を含む)>

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
社会的逆境からの回復・成長に関連する個人的強みの検討	東洋大学社会学部教授	黒沢 香	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討
社会的逆境からの回復・成長過程につながる育成メディアの検討	東洋大学社会学部准教授	関谷直也	回復・成長モデルに基づく育成メディア構築の検討

(変更の時期:平成26年3月31日)



新

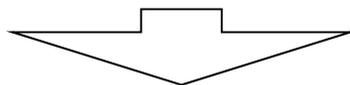
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
	退任		

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



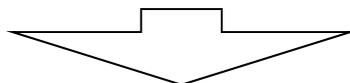
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
関西国際大学人間科学部教授	東洋大学社会学部教授	桐生正幸	回復・成長モデルにおける社会病的資源の検討

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 26 年 4 月 1 日)



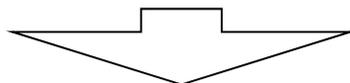
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部准教授	東洋大学社会学部准教授	尾崎由佳	回復・成長モデルに基づく個人的強みの検討

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 4 月 1 日)



新

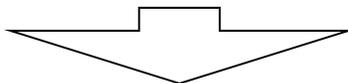
変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部准教授	東洋大学社会学部准教授	鈴木規子	個別事例による回復・成長資源の抽出

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 7 月 1 日)



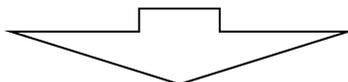
新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東洋大学社会学部教授	東洋大学社会学部教授	松田英子	回復・成長モデルにおけるパーソナリティ要因の検討
東洋大学社会学部教授	東洋大学社会学部教授	山田一成	回復・成長モデルにおける社会意識の検討

旧

プロジェクトでの研究課題	所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割

(変更の時期:平成 27 年 8 月 1 日)



新

変更前の所属・職名	変更(就任)後の所属・職名	研究者氏名	プロジェクトでの役割
東北学院大学教授	東北学院大学教授	堀毛裕子	回復・成長モデルに基づく強みとウェル・ビーイングの関連の検討

11 研究進捗状況(※ 5枚以内で作成)

(1) 研究プロジェクトの目的・意義及び計画の概要

本プロジェクトは、犯罪被害、被災、死別、病気、離別、経済的困窮など社会と強く関わる個人の経験を広く「社会的逆境」として捉え、こうした問題に対処しようとする人々の精神的回復・成長に焦点をあわせる。具体的には 1) 精神的回復・成長をもたらす要因となる個人的・社会的資源の解明、2) それらの資源間の力動的相互関係の検討、3) 個人や社会のウェル・ビーイングにつながるプロセスの解明、という3点を課題として研究・実践を行う。その意義は、ネガティブな状態からの回復に焦点をあててきた従

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

来の研究に対し、回復を越えた成長を人間の「強み」ととらえ、その育成につながる資源について、単なる心理主義に陥らず家族やコミュニティなどの社会的資源を重視し、新たな観点から成長のプロセスを解明することにある。そのために散在する知見を集約し、比較文化的な視野も含め広く社会に成果を還元できる包括的な研究拠点の形成を目的とする。

(2) 研究組織

統括責任者であるセンター長が研究員4名(本学教員)を指名して運営委員会を構成し、議長(センター長)が適宜招集する会議(メール会議を含む)における討議に基づいて研究活動を管理している。研究に際しては、個人研究のほか、各課題を扱う小グループを構成し、グループリーダーの指揮の下に実施している。グループリーダーは運営委員を兼任し、プロジェクト全体の進行を考慮しながらグループの研究活動を調整する。グループの研究活動に伴う予算の申請、執行、研究報告に関しては、グループリーダーが責任を負うことになる。また、研究員相互の学術的コミュニケーションを緊密に行うために、適宜、メーリングリスト等を通じて各グループの研究成果について意見交換を行う。PD1名およびRA3名(うち1名は韓国人留学生)には、以上の活動において一定の役割を担わせ、研究活動のノウハウを身につけるように指導している。

各研究グループへは、学内に設置されたセンター事務室において、予算執行の事務手続き、大型プリンタ等の機器利用などに関して、適宜、支援をしている。翰林大学応用心理研究所、成均館大学大学院心理学専攻、東京未来大学モチベーション研究所、立正大学心理学研究所との連携については、各研究所・専攻の代表と緊密な連絡をとりながら、共同セミナーの開催や共同研究の実施等について決定する体制をとっている。

(3) 研究施設・設備等

本プロジェクトは、東洋大学白山キャンパス2号館 20412 室のセンター事務室を中心に行われている。事務室の面積は32㎡であり、使用者はプロジェクトに参加する23名のほかに、PD1名、RA3名、アルバイト3名の計30名である。センター事務室内には、プロジェクト遂行に必要なパソコン、大型プリンタ、光イメージング脳機能測定装置等を設置、PD または RA を月曜から土曜の9時から18時の間に常駐させている。これにより、センターの事務、小規模の会議、資料等の作成を常時行えるようになっている。

(4) 進捗状況・研究成果等 ※下記、13及び14に対応する成果には下線及び*を付すこと。

< 現在までの進捗状況及び達成度 >

1. 社会的逆境に関する大規模調査 プロジェクトが開始された平成25年度には、主要な活動として社会的逆境の実態を把握するための大規模なweb調査を実施した。この調査では、10,000人を越える20代~60代の男女を対象にして、さまざまな種類の社会的逆境が及ぼす心理的影響や立ち直りの程度などが多角的に測定された。得られたデータは、年齢・性別などさまざまな要因が立ち直りの様相に及ぼす影響について分析を進めてきた。平成26年度には、社会的逆境の種別(家庭内不和、介護など)ごとの調査も追加的に実施して詳細な分析が行われ、現在に至るまで心理学関

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

係の学会で逐次発表*1-6をおこなってきた。現在、調査の全体的なまとめを行う準備を進めている。この調査は、今後、回復を促進する介入研究の基礎的資料として利用するものであり、この点でプロジェクトの目標達成に向けて順調に進んでいるといえる。また、社会的逆境の心理的影響を測定するために頻繁に使用される尺度(GHQ12、心理的ウェル・ビーイング尺度など)に関しても、本調査によって標準化の作業に相当する基礎的資料を得たので、これらを今後の研究に活用できることになった。

2. 逆境調査の拡張 社会的逆境調査は日本人を対象として実施されたが、その後、研究協力協定を結んでいる韓国翰林大学心理学研究所の協力を得て、韓国の中高年の男女を対象として同様の調査を実施*7した。その結果、調査対象者があげる社会的逆境の種類が大きく異なることや利用される心理的・社会的資源に違いが認められるなど、文化比較を行うことによって社会的逆境の影響を多面的に理解できることが示唆された。結果は、来年度、韓国心理学会大会において発表の予定である。

3. 若手研究者の養成 本プロジェクトは、もともと若手研究者の育成を一つの柱としているが、この点に関しては外部評価委員よりさらなる強化が必要であることが指摘された。これを受けて、平成26年度には日本グループ・ダイナミックス学会大会(東洋大学)において日韓若手研究者共同セミナー*8を開催、本プロジェクトに関わる東洋大学および成均館大学の大学院生が活発な議論をおこなった。その後、この交流は社会的逆境経験者の悲嘆表出に関する日韓比較研究に発展し、これまで両大学において3回の共同セミナー*9を実施した。こうした研究の成果は平成28年度7月に開催される国際心理学会議(ICP2016)のテーマセッション*10において発表、議論される予定である。

4. 方法論の検討 社会的逆境に対する心理的影響をとらえるには自己報告に基づく尺度が使われることが多いが、その弱点を埋め合わせるために異なる方法による測定が必要となる。本プロジェクトでは、新しく加わったメンバーの専門性をいかして二つの方法の使用を検討した。一つは脳機能の測定である。社会的逆境の影響を自己評定法による変化と脳機能の変化を対応づけて検討することによって、回復のプロセスをより精緻に検討することが期待できる。本年度は「光イメージング脳機能測定装置」を導入し、これまで装置使用の習熟度を高めるように努めた。もう一つ、検討を試みてきたのは経験サンプリング法である。経験サンプリング法(経験抽出法)は、日常生活を送っている調査対象者に対し、数日間にわたって1日数回、(定刻あるいは無作為な時刻における測定を実施する調査手法であり、生態学的妥当性が確保できると同時にスマートフォンを利用して比較的安価に実施できることもあり、近年注目されている。本プロジェクトでは、とくにスマートフォンを利用した経験サンプリング法を実施した場合のメリットとデメリットを詳細に検討しており、平成28年度以降の研究における利用に備えている。

5. 関連領域の研究者との研究交流 本プロジェクトのメンバーは社会心理学や社会福祉学を専門とするが、社会的逆境後の回復・成長を総合的に理解するためには、関連領域の研究者との研究交流が重要な意味をもつ。本センターはプロジェクトの当初より、研究協力協定を締結している組織のメンバーと協力して国際的な比較研究を実施したりシンポジウムを開催したりして、この面での充実をはかってきた。平成25年度には研究員4名と大学院生3名がカナダのブリティッシュコロンビア大学を

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

訪問し、森田療法の世界的権威である石山一舟教授の関係者と共同セミナーを開催した。これがきっかけとなり、平成 26 年度に日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会（東洋大学）においてブリティッシュコロンビア大学の南昌廣氏を招き、講演会「社会心理学と平和構築—大量虐殺後のルワンダにおける和解と癒しの試み」を開催*11し、社会的逆境の心理的・社会的資源に関して刺激的な交流をおこなうことができた。平成 28 年 2 月には、ストラスブール大学のシルマン教授とロウエル教授を招きシンポジウム「分断から統合へ—ストラスブールとフクシマ」を開催*12、独仏への帰属の変更が繰り返されたストラスブールの問題や各国国民の「ヨーロッパ」の知覚に関して、歴史学、政治学、社会学の視点から話題提供をいただいた。これを受けて日本側研究者が原発事故により避難生活を続ける人々の「分断」の現状とコミュニティ「統合」への道筋について話題提供を行い、最後に両者の共通点と相違点を歴史的、文化的、心理学的視点から検討した。さらに、平成 28 年 3 月には韓国江原大学の黄昭淵教授を招き、高浜虚子の著作を通して日本人の朝鮮観および社会的逆境に対する日本的心性について討論*13をおこなった。以上の活動により、文化的、歴史的な広がりの中で社会的逆境の問題を扱う姿勢をメンバー間で共有できるようになった。

6. 社会的逆境の種類拡張 本プロジェクトでは、これまでさまざまな種類の社会的逆境を扱ってきたが、平成 26 年度より新たなメンバーが加わったことにより、社会的逆境の一つであるカルト被害を扱うことが可能となった。近年、カルト的団体が高校生にまで対象を広げて勧誘を行っており、その被害が深刻化している。こうした状況に鑑み、本センターでは平成 27 年度にはカルト被害者とその家族を支援するフランスの団体“Union nationale des associations de défense des familles et de l'individu” (UNADFI)の代表 C. ピカール氏を招いて講演会を開催*14し、カルト被害を防ぐための社会的資源について情報交換をおこなった。さらに、高校生の被勧誘状況を明らかにするための Web 調査を実施し、今後の研究および実践の足がかりを作った。この調査では、社会全体で勧誘に対する感受性を高めることの重要性が指摘されている。

以上、全体的に見れば、中間時点において十分な成果をあげており、研究拠点の形成、および社会的逆境からの回復を促進する資源のモデル化という最終目標に向かう体制が整いつつある。

<特に優れた研究成果>

研究成果としての学術論文や学術書はまだ少ないが、プロジェクト全体の進行状況からすると、プロジェクト終了の年までにそれらを生み出すための準備が整いつつある。とくに、社会的逆境の影響に関する大規模調査が既に実施されており、文化比較も行われている。これが一つの柱となり書籍等の形に結実することが予想される。

ジャーナリストの役割について検討を加えていることも優れた点であると思われる。従来、ジャーナリストに関しては取材時のメディアスクラムのように否定的側面が問題とされることが多かったが、一般社会と被害者・被災者を結ぶ役割を果たす報道内容やジャーナリストの惨事ストレスを検討することは、本プロジェクトの中では回復を促す社会的資源の問題を扱うことになる。最終的な目標である「社会的逆境からの回復のモデル」を構築する上で欠かせない側面であるといえる。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

<問題点とその克服方法>

これまで、国内の2つの大学の研究所、海外（韓国）の2つの大学の研究所および大学院研究科と協力協定を締結して研究の基盤作りをおこなってきた。将来の研究に資するためのネットワークを形成しその中心に本センターを位置づけることが目的であったが、こうしたネットワークを利用した個々の研究が拡散してしまう可能性がある。今後、本来のプロジェクトの目標から逸れないように、今後の活動においては各研究グループ同士が十分な連携をとりながら、これまで構築したネットワークを意味ある形で活用する予定である。

<研究成果の副次的効果(実用化や特許の申請など研究成果の活用の見通しを含む。)>

これまでの活動は拠点としての体制作りと、方法論の検討も含む基礎的な調査研究を中心としていたため、とくに特定可能な副次的効果はない。

<今後の研究方針>

これまで3年間にわたり、本センターのプロジェクトのさまざまな面に関連する海外（韓国、カナダ、フランス、ドイツ）の研究者を招いて研究交流を行った。物理的な研究拠点というよりも、本センターを中心とした人的ネットワークを構成するという意味での「拠点」であるが、今後、こうしたネットワークを活用して、残された2年間、プロジェクトの目標の達成に向けて研究を進める予定である。とくに、社会的逆境の心理的・社会的資源に関するモデルを構築するという当初の目標を達成するためにも、可能な領域で介入研究を実施してモデルの検証を進める必要がある。また、ジャーナリストの惨事ストレス研究に関しては、韓国の研究者との共同研究を軸に、被災者、一般市民、ジャーナリストの相互関係を明らかにする方向に研究を展開させることになる。当初の目的にあるように、異なる被災・被害状況にある人々の心理やそれを取り巻く社会との関わりを総合的に理解する視点を明確にして、プロジェクト後半の研究活動を実行する予定である。社会的逆境の種類としては、引き続き航空機事故、カルト、原発事故、テロ（地下鉄サリン事件）被害などを対象として短期的、長期的な視点から研究を進めるとともに、その回復に至る基礎的な心理プロセスをさまざまな手法を使って明らかにする予定である。

これまでの研究成果の発表に関しては、平成28年7月に横浜で開催される国際心理学会議(ICP2016)の場を活用する予定である。具体的には、「自然災害におけるジャーナリストの職務関連ストレス」というテーマの下、米国から E. Newman 教授、オーストラリアから Dart Center Asia Pacific 代表の C. McMahon 氏を招いて本センター研究員数名とシンポジウムを実施する*15 他、日韓の若手研究者が中心になって社会的逆境をテーマにセッションを構成する予定である。

今後、各グループによる実証的研究をさらに活発化すると同時に、研究の成果を国内外の学会で発表したりシンポジウムを開催したりして、社会への還元を着実にやっていく予定である。

<今後期待される研究成果>

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

プロジェクトの活動開始から現在までは、社会的逆境に関する Web 調査のように、基礎的な資料を得ることを目的にした研究が中心であったが、今後は、4つの逆境領域における回復・成長資源の時系列的比較と、ネットによる介入を通じた検証の試みを実施すべく準備を進めている。

<自己評価の実施結果及び対応状況>

自己評価は、年度末に実施される外部評価委員会に先立ち、通常行われる幹事会の中で実施している。外部評価委員会においては予算執行状況および1年間の活動実績を詳細に説明することになっているため、幹事会メンバーが事前にパワーポイントによる発表資料を作成する。この段階で一年間の活動の自己評価が可能であり、当該年度の目標に照らしてどの程度達成しているかを評価する。今年度に関しては、年度末の予算執行が必ずしも予定通りに進まなかったことが反省点としてあげられた。また、外部評価委員会開催後の幹事会においては、3名の委員の評価について議論する中で、自己評価とのズレやその原因について理解を深め、次年度の活動のあり方を検討した。とくに、評価委員から受けた「残り2年の研究期間の方針を提示して最終報告を準備するのがよい」とのアドバイスに対応して、これまで策定してある研究方針を各研究員が明確に意識することを働きかけるとともに、幹事会がスケジュール管理を徹底することを申し合わせた。

<外部（第三者）評価の実施結果及び対応状況>

3名の委員（学内1名、学外2名）から成る外部評価委員会を設置し、各年度末に評価委員会を開催している。委員会では、センター長および事務局長から当該年度の活動実績および予算執行状況について説明を行った後、質疑応答を経て、最後に評価書への記入を求めることにしている。この評価に基づき、幹事会において問題点等を検討、次年度に向けて必要な修正を行っている。これまで、概ね肯定的な評価を受けているが、平成26年度の評価において大学院生(RA)の指導をさらに強力に進める必要があるとの指摘を受け、研究協力協定を締結している韓国成均館大学の大学院生（社会心理学専攻）との共同研究実施をサポートした結果、研究成果を来年度国際学会で発表し、さらに共同研究を企画するなど研究者としての成長を見ることができた。平成27年度末に行われた評価委員会では、大学院生も含め海外との研究交流が充実してきたことが高く評価され、今後とも、研究交流に必要な予算を十分に確保すべきとの指摘を受けた。これを受けて、28,29年度は各研究グループに海外研究者との研究交流を進めるように促すとともに、国際学会等で積極的に成果を発表する予定である。

12 キーワード(当該研究内容をよく表していると思われるものを8項目以内で記載してください。)

- (1) 逆境 (2) レジリエンス (3) 災害
(4) 被害者 (5) 被災者 (6) 回復
(7) 成長 (8) ストレス

13 研究発表の状況(研究論文等公表状況。印刷中も含む。)

上記、11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付すこと。

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

<雑誌論文>

1. 大坊郁夫 (2015). 感情研究の彼岸はどこにある？—感情心理学は新たな科学として飛翔する— 感情心理学研究, 22(2), 89-93. (査読有)
2. 大坊郁夫 (2015). Well-being を目指す対人コミュニケーション研究 モチベーション研究, 4, 1-10. (無)
3. 福岡欣治(2015). 日常ストレス経験に伴う親友からの肯定的および否定的相互作用と心理的健康—ペア・データを含めた検討— 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 273-281. (無)
4. 福岡欣治 (2015). 他者依存性とソーシャル・サポートが心理的健康に及ぼす影響—大学生の友人関係における実際のサポート授受に注目して— 川崎医療福祉学会誌, 24(2), 201-207. (査読無)
5. 山本須美子(2015). 「EUにおける「新しい」中国系コミュニティの特徴——イタリア・ハンガリー・ドイツの場合」『東洋大学社会学部紀要』52(2)、87-101. (査読無)
6. 山本須美子(2015). 「オランダにおける中国系第二世代の社会統合——ライフストーリーの分析から」『移民政策研究』7、151-166. (有)
7. Yamamoto, Sumiko (2015). 'School Success and Failure: Changes seen in children of Chinese descent in Paris', *Journal 華人とは何か？華人 3 世、2 世、1.5 世の語りから見る在日華人意識の変容 of Chinese Overseas* 11-1、72-86. (査読有)
8. 山本須美子(2015). 「オランダにおける文氏宗親会の現状と役割」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』50: 151-164、 (査読無)
9. Cheong, Y.G., Rie, J., Ando, K., & Fukuoka, Y. (2015). Risk reporting and the crisis of journalists. *Korean Journal of Broadcasting & Telecommunications Research*.
10. 朴 喜静・大坊郁夫 (2014). 個人特性が嘘をつくときに表われる非言語行動に及ぼす影響 応用心理学研究, 39(3), 215-224. (査読有)
11. 大坊郁夫 (2014). 場を活性化するコミュニケーション 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 11 号, 71-75. (査読無)
12. Ken Fujiwara & Ikuo Daibo (2014). The extraction of nonverbal

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

behaviors :Using video images and speech-signal analysis in dyadic conversation *Journal of Nonverbal Behavior*,38,377-388. (査読有)

13. 朴 喜静・大坊郁夫 (2014). 怒りと悲しみが真偽性判断の正答率に及ぼす影響 応用心理学研究, 40(1), 1-10. (査読有)
14. 月田有香・高嶋和毅・横山ひとみ・市野順子・伊藤雄一・大坊郁夫・北村喜文 (2014). 即興劇 (インプロ) によるコミュニケーショントレーニングが集団討論場面に与える影響 電子情報通信学会技術研究報告, 114(67), 193-198. (査読無)
15. 横山ひとみ・大坊郁夫 (2014). 対面説得事態での送り手の非言語行動の検討 応用心理学研究, 40(2), 93-101. (査読有)
16. 清水裕士・大坊郁夫 (2014). 潜在ランク理論による精神的健康調査票(GHQ)の順序的評価 心理学研究, 85(5), 464-473. (査読有)
17. 上出寛子・田中共子・堀毛一也・藤森立男・大坊郁夫 (2014). well-being の心理学～今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～ 応用心理学研究,40、106-137. (査読有)
18. Go Endo, Hirokazu Tachikawa, Yoshiharu Fukuoka, Miyuki Aiba, Kiyotaka Nemoto, Yuki Shiratori, Yutaka Matsui, Masafumi Doi, & Takashi Asada (2014). How perceived social support relates to suicidal ideation: A Japanese social resident survey. *International Journal of Social Psychiatry*, 60(3) 290-298. (査読有)
19. 堀毛一也 (2014). 持続可能な well-being をどう目指すか 日本応用心理学会公開シンポジウム 2013 Well-being の心理学～今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践～ 応用心理学研究,40,2,120-127. (査読有)
20. 角山剛 (2014). 組織行動をめぐる最近の研究動向 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報第 11 号, p.13-16. (査読無)
21. 角山剛 (2014). 動機づけ心理学はどのように活用されているか 児童心理臨時増刊号金子書房 (査読無)
22. Kato, T. (2014). Testing the sexual imagination hypothesis for gender differences in response to infidelity. **BMC Research Notes**, 7:860. DOI: 10.1186/1756-0500-7-860. PMID: 25432800
23. Kato, T. (2014). Relationship between coping with interpersonal stressors and depressive symptoms in the United States, Australia, and China: A focus on

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- reassessing coping. *PLoS ONE*, *9(10)*: e109644. DOI: 10.1371/journal.pone.0109644. PMID: 25299135 (査読有)
24. Kato, T. (2014). Effects of flexibility in coping with chronic headaches on depressive symptoms. *International Journal of Behavioral Medicine, *first published online: September 18*.* DOI: 10.1007/s12529-014-9443-1. PMID: 25231548 (査読有)
25. Kato, T. (2014). A reconsideration of sex differences in response to sexual and emotional infidelity. *Archives of Sexual Behavior, **43*, 1281-1288. DOI: 10.1007/s10508-014-0276-4. PMID: 24647817. (査読有)
26. Kato, T. (2014). Coping with workplace interpersonal stress among Japanese employees. *Stress and Health*, first published online: March 18. DOI: 10.1002/smi.2566. PMID: 24639236. (査読有)
27. Kato, T. (2014). Development of the Sleep Quality Questionnaire in healthy adults. *Journal of Health Psychology, **19*, 977-986*. *DOI: 10.1177/1359105313482168. PMID: 23720542 (査読有)
28. Kato, T. (2014). Insomnia symptoms, depressive symptoms, and suicide ideation in Japanese white-collar employees*. International Journal of Behavioral Medicine, **21*, 506-510*. *DOI: 10.1007/s12529-013-9364-4. PMID: 24136401. (査読有)
29. Kato, T. (2014). Coping with interpersonal stress and psychological distress at work: Comparison of hospital nursing staff and salespeople. *Psychology Research and Behavior Management, 7*, 31-36. DOI: 10.2147/PRBM.S57030. PMID: 24470781. (査読有)
30. 久保ゆかり (2014). 自己の過去経験について語ること (autobiographical narratives) の発達 東洋大学 21世紀ヒューマン・インターアクション・リサーチ・センター研究年報, 11, 17-22. (査読無)
31. 市村美帆・高田治樹・増野智彦・吉野美緒・稲本絵里・松井豊・横田裕行 (2014). 病院前救急診療活動を行う医師の精神的健康状態との関連 日本救急医学会雑誌、25(4),141-151. (査読有)
32. 高橋幸子・桑原裕子・松井豊 (2014). 東日本大震災で被災した自治体職員の急性ストレス反応 ストレス科学, 29, 60-67. (査読有)
33. 桑原裕子・高橋幸子・松井豊 (2014). 東日本大震災で被災した自治体職員の外傷後成長 筑波大学心理学研究,47,15-23. (査読有)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

34. 山本陽一・松井豊 (2014). 中高生のボランティア動機、ボランティア活動の援助成果の探索的検討ー感想文の内容分析を通してー 筑波大学心理学研究,47,37-45. (査読有)
35. 茨木詩織・松井豊 (2014). 悩みを相談したくてもできないときに 身近な人に求める接し方の検討 筑波大学心理学研究,48,19-28. (査読有)
36. 高本真寛・松井豊 (2014). 対人ストレス・コーピングがストレスの解決認知を媒介して精神的健康に及ぼす影響についての確証的検討 筑波大学心理学研究,48,29-35. (査読有)
37. 仲嶺真・松井豊 (2014). 街中での異性への話しかけへの態度 ー行為者の印象、パーソナリティ、行動的検討ー 筑波大学心理学研究,48,37-47. (査読有)
38. 水野剛也 (2014). 「日系アメリカ人強制立ち退き・収容をめぐる日米プロパガンダ戦 第二次世界大戦時のラジオ・トウキョウと「人質」論の再考」、『メディア史研究』第36号 (2014年8月) : 42-65. (査読有)
39. 西野理子「追跡パネル調査の改善に向けて:全国家族パネル調査の経験より」 『中央調査報』 No.683 : 1-7. (査読無)
40. *堀毛一也・安藤清志・大島尚 (2014). 社会的逆境後の精神的回復・成長につながる資源ーポジティブ心理学的観点を中心にー 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報 第11号 3-8. (査読無)
41. Yuko Suda (2014) Changing relationships between nonprofit and for-profit human service organizations under the long-term care system in Japan. *Voluntas*, 25: 1235 - 1261. (査読有)
42. 須田木綿子・児玉寛子 (2014) 高齢者と家族介護者の精神的健康 (査読あり) 老年社会科学, 36(1), 34-38, 2014. (査読有)
43. 古城隆文・谷口尚子 (2014). 「選挙制度が有権者の満足度に与える影響の国際比較分析」『東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター研究年報』 Vol. 11, 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター, pp. 51-70. (査読無)
44. 谷口尚子 (2014). 「政治学における実験研究: 概要と展望」『選挙研究』第30巻1号, 日本選挙学会、pp.5-15 (有)
45. 戸梶亜紀彦 (2014). 職務動機づけを高めた出来事に関する検討 (2) ー仕事への責任・組織での役割を自覚した体験についてー 東洋大学社会学部紀要, 51-1号,

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

27-43. (査読無)

46. 戸梶亜紀彦 (2014). 「感動体験を応用したワーク・モチベーションの効果的向上について」モチベーション研究 (モチベーション研究所), Annual Report 第3号, 48-56. (査読無)
47. 相羽美幸・太刀川弘和・福岡欣治・遠藤剛・白鳥裕貴・土井永史・松井豊・朝田隆 (2013). 自殺念慮とソーシャル・サポートの互惠性—茨城県笠間市民を対象とした地域住民調査から— 自殺予防と危機介入, 33(1), 17-26. (査読有)
48. 相羽美幸・太刀川弘和・福岡欣治・遠藤剛・白鳥裕貴・松井豊・朝田隆 (2013). 簡易ソーシャル・サポート・ネットワーク尺度 (BISSEN) の開発 精神医学, 55(9), 863-873. (査読有)
49. 福岡欣治 (2013). 女子大学生におけるソーシャル・サポートおよび食に対する知識と適切な食行動のセルフ・コントロール 川崎医療福祉学会誌, 23(1), 101-110. (査読無)
50. Kato, T. (2013). Frequently used coping scales: A meta-analysis. Stress and Health, published online: December 12. DOI: 10.1002/smi.2557. PMID: 24338955. (査読有)
51. Kato, T. (2013). Insomnia symptoms, depressive symptoms, and suicide ideation in Japanese white-collar employees. International Journal of Behavioral Medicine, vol.21(3), pp.506-510, published online: October 18. DOI: 10.1007/s12529-013-9364-4. PMID: 24136401. (査読有)
52. Kato, T. (2013). Development of the Sleep Quality Questionnaire in Healthy Adults. Journal of Health Psychology, vol.19(8), 977-986, published online: May 29. DOI: 10.1177/1359105313482168. PMID: 23720542 (査読有)
53. 久保ゆかり (2013). 社会的知覚から社会的認知へ—他者理解の発達— 東洋大学 21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究年報, 10, 31-37. (査読無)
54. 松井豊・立脇洋介・兪善英 (2013). 消防職員の惨事ストレスケア—惨事ストレス研修と危機介入システム— 産業精神保健, 21(1), 18-30. (査読無)
55. 仲嶺真・大坊郁夫・松井豊 (2013). 初対面異性間における対人魅力と会話行動が親密化願望に及ぼす影響 筑波大学心理学研究, 46, 49-56. (査読有)
56. 吉野美緒・重村朋子・市村美帆・稲本絵里・川尻泰樹・増野智彦・松井豊・横田裕

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- 行 (2013). 病院前救急診療活動に従事する看護師の精神的健康に関する研究 日本臨床救急医学会雑誌,16(5),649-655. (査読有)
57. 古村健太郎・松井豊 (2013). 親密な関係におけるコミットメントのモデルの概観 対人社会心理学研究,13,59-70. (査読有)
58. 古村健太郎・仲嶺真・松井豊 (2013). 投資モデル尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討 筑波大学心理学研究,46,39-48. (査読有)
59. 兪善英・松井豊 (2013). 親しい他者に対するストレス開示抑制態度が精神的健康に及ぼす影響 筑波大学心理学研究,46,57-58. (査読有)
60. 兪善英・松井豊・畑中美穂 (2013). 都市部の消防団員における家族に対するストレス開示抑制態度とソーシャルサポートが精神的健康へ及ぼす影響 対人社会心理学研究, 13,49-58. (査読有)
61. 水野剛也 (2013). 「若者に新聞を読ませるには? 女子大生から見た、新聞の『いいね』『ビミョー』」 日本新聞労働組合連合(新聞労連) 産業政策研究会編,『新聞労連産業政策研究会第2期最終報告書 新聞2013 この山をどう登るか』(産業政策研究会), 90-96. (査読無)
62. 水野剛也 (2013). 「ひといき① 『紙の新聞』は記憶に残る」, 「ひといき② 若者に新聞を読ませるには」, 「ひといき③ アメリカの若者のニュース源」 日本新聞労働組合連合(新聞労連) 産業政策研究会編,『新聞労連産業政策研究会第2期最終報告書 新聞2013 この山をどう登るか』(産業政策研究会), 18, 41, 68. (査読無)
63. 水野剛也・福田朋実 (2013). 「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(中編) 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第50巻・第2号, 19-36. (査読無)
64. 水野剛也・福田朋実 (2013). 「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(後編-1) 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第51巻・第1号, 5-12. (査読無)
65. 水野剛也・福田朋実 (2013). 「新聞4コマ漫画が描く鳩山由紀夫首相(後編-2) 首相在任期間中の3大紙の4コマ漫画に関する一分析 2009~2010」, 『社会学部紀要』第51巻・第2号, 5~21. (査読無)
66. Takeya Mizuno, (2013)“A Disturbing and Ominous Voice from a Different Shore: Japanese Radio Propaganda and its Impact on the US Government’s Treatment of Japanese Americans during World War II,” The Japanese Journal of

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

American Studies No.24 (June 2013): 105-124. (査読有)

67. Mizuno, T. (2013). "An Enemy's Talk of 'Justice': Japanese Radio Propaganda against Japanese American Mass Incarceration during World War II," *Journalism History* Vol.39, No.2, (Summer 2013): 94-103. (査読有)
68. 須田木綿子 (2013). 「営利・非営利サービス供給組織の差異の縮小と社会福祉法人の存在意義」 *ソーシャルワーク研究*, 39(1), 54-63. (査読無)

<図書>

1. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター (HIRC21) (2015) 「現代人のこころのゆくえ 4—ヒューマン・インタラクションの諸相—」, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター, 128.
2. Kato, T. (2015). Burnout as a Risk Factor for Strain, Depressive Symptoms, Insomnia, Behavioral Outcomes, Suicide Attempts, and Well-Being among Full-Time Workers. T. N. Winston (Ed.), *Handbook on Burnout and Sleep Deprivation: Risk Factors, Management Strategies and Impact on Performance and Behavior*. NOVA Science Publishers. Pp.233-252
3. 安藤清志 (2014). 自己呈示と対人関係: 「自己と対人関係の社会心理学」の視点から 社会心理学研究の新展開 北大路書房 152.
4. 大坊郁夫 (2014). 場を活性化する: 対人コミュニケーションの社会心理学 高木修 監修 大坊郁夫・竹村和久編「社会心理学研究の新展開—社会に生きる人々の心理と行動」 26-39. 北大路書房 209.
5. 堀毛一也 (2014). パーソナリティと状況 唐沢かおり (編) 新・社会心理学 (pp.71-91) 北大路書房 218
6. 堀毛一也 (2014). 状況と性格 下山晴彦 (編集代表) 誠信心理学辞典 新版 (p.333-335) 誠信書房 1104.
7. 角山剛 (2014). 心理学検定公式問題集 2014 年度版(p.356-383) 実務教育出版 436.
8. 松井豊 (2014). 思いやり行動をとる心の動き 日本心理学会 (監) 高木修・竹村和久 (編) 思いやりはどこから来るの? =利他性の心理と行動(103-116) 誠信書房 188.
9. 立脇洋介・松井豊 (2014). 恋愛 児童心理学の進歩 2014 年版(96-119) 日本

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

児童研究所 (監修) 金子書房 328.

10. 水野剛也 (2014). 『「自由の国」の報道統制 大戦下の日系ジャーナリズム』 吉川弘文館 208.
11. 須田木綿子 (2014). 福祉 NPO の役割と課題 社会福祉事典 丸善出版 784.
12. 須田木綿子 (2014). 論文投稿支援 社会福祉事典 丸善出版 784.
13. 山本須美子 (2014). EU における中国系移民の教育エスノグラフィ 東信堂 376.
14. 平岡公一・武川正吾・山田昌弘・黒田浩一郎(監修) 須田木綿子・鎮目真人・西野理子・榎田美雄(編) (2013). 研究道：学的探究の道案内 東信堂 320.
15. 堀毛一也 (2013). ポジティブ心理学の発展ーパーソナリティ領域を中心に 日本パーソナリティ心理学会 (企画) パーソナリティ心理学ハンドブック (pp.508-514) 福村出版 782.
16. 角山 剛 (2013). 産業領域 藤永保(監修) 最新 心理学事典 平凡社 910.
17. 角山 剛・佐久間俊和・田中康之・黒澤俊平 (2013). 実践 モチベーション・マネジメント PHP 出版 183.
18. 小玉正博・松井豊 (編) (2014). 生涯発達の中のカウンセリングIV 看護現場で生きるカウンセリング(pp.205-223) サイエンス社 288.
19. 西田公昭 共編著 (2013). 大学生のリスク・マネジメント 吉川肇子・杉浦淳吉・西田公昭編 ナカニシヤ出版 160.
20. 西田公昭 (2013). マインド・コントロール 谷口泰富・藤田主一・桐生正幸編 クローズアップ犯罪(pp.213-222) 福村出版 241.
21. 松井豊 (2013). 災害救援者の惨事ストレス (財)日本防火・危機管理促進協会(編) 東日本大震災に対する危機への対応 同協会発行, pp.70-106.
22. 大島 尚 (2013). 社会関係資本の測定とその意義について 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター(編) 現代人のこころのゆくえ 3 (pp.83-102) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター 134.
23. 須田木綿子 (2013). 海外英文誌への投稿というチャレンジ 平岡公一・武川正吾・山田昌弘・黒田浩一郎(監修) 須田木綿子・鎮目真人・西野理子・榎田美雄(編) 研

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

究道：学的探求の道案内(pp.235-246) 東信堂 320.

24. 須田木綿子 (2013). アクティブ・エイジングの実際 福祉社会学会編集 福祉社会ハンドブック：現代を読み解く 98 の論点(pp.152-153) 中央法規 223.
25. 須田木綿子 (2013). 何が高齢者虐待を生み出すのか？ 福祉社会学会編集 福祉社会ハンドブック：現代を読み解く 98 の論点(pp.156-157) 中央法規 223.
26. 須田木綿子 (2013). 恩師について 山手茂・米林喜男・須田木綿子編 園田保健社会学の形成と展開(pp.156-163) 東信堂 300.
27. 谷口尚子 (2013). 訪問面接調査とインターネット調査にみる投票行動・政治意識の差 現代人のこころのゆくえ 3 (pp.103-134) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター 134.
28. 山手茂・米林喜男・須田木綿子編 (2013). 園田保健社会学の形成と展開 東信堂 300.
29. 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター (HIRC21) (2013) 「現代人のこころのゆくえ 3—ヒューマン・インタラクシオンの諸相—」, 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター, 134.

<学会発表>

1. 安藤清志 「カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち」日本社会心理学会 2014 年度第 58 回公開シンポジウム (指定討論) 2014 年 11 月 神奈川県横浜市 (フェリス女学院大学緑園キャンパス)
2. Fujiwara, K., Xinhua, M., Kimura, M., Iso, Y., & Daibo, I. “Improving Group Performance: Equality in Utterances and the Proportion of Females to Males.” The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, U.S.A. (February, 2015).
3. Fujiwara, K., & Daibo, I. “Evaluating interpersonal synchrony with an automated method: Using spectrum analysis toward an unstructured conversation situation.” The Nonverbal Behavior Pre-Conference at The 16th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Long Beach, California, U.S.A. (February, 2015).
4. 西野理子 『夫婦関係の推移をとらえる試み』 家族社会学会第 3 回家族パネル研究会 2015 年 2 月 東京都文京区

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

5. 田中恵子・中村健壽・福岡欣治 『医事課職員におけるバーンアウト』 日本医療秘書学会第12回学術大会 2015年2月 愛知県名古屋市
6. 福岡欣治 『保育園児をもつ母親の子どもへの働きかけと、子どもの社会的行動—子育てにおけるサポート源との関連を含めて—』 岡山心理学会第62回大会 2014年12月 岡山県岡山市
7. 高垣明日香・福岡欣治 『両親同士の関係の良さは、大学生の友人関係と関連するか—社会的スキルおよび自尊感情を介した影響と、その男女差—』 岡山心理学会第62回大会 2014年12月 岡山県岡山市
8. 山本須美子 『華人とは何か？華人3世、2世、1.5世の語りから見る在日華人意識の変容』日本華僑華人学会 シンポジウム(コメンテーター) 2014年11月 東京都新宿区
9. 西田公昭 『カルト問題とマインド・コントロール論再考—今なお幻想の彼方へ惹かれる若者たち』 日本社会心理学会第58回公開シンポジウム(話題提供) 2014年11月 神奈川県横浜市
10. 西田公昭 『学校における文化研究の新たな可能性 — 学校行事と部活動に焦点化したフィールドワークから —』 日本教育心理学会第56回大会 自主シンポジウム(指定討論) 2014年11月 兵庫県神戸市
11. 福岡欣治 『大学生のSNS利用と精神的健康—SNS利用時の肯定的および否定的経験に注目して—』 日本健康心理学会第27回大会 2014年11月 沖縄県国頭郡
12. Suda, Y “Nonprofit and for-profit operation under mixed economy: Mezzo-level organizational study approach.” The 9th Korea-Japan Symposium, Seoul, Korea (Oct, 2014).
13. 福岡欣治 『大学生の性同一性障害に対する経験と認識—身体障害、精神障害との比較から—』 中国四国心理学会第70回大会 2014年10月 広島県東広島市
14. 山本須美子 『ネーションと跨境——韓国・朝鮮の挑戦、生活の適応』 韓国朝鮮文化研究会 シンポジウム(コメンテーター) 2014年10月 東京都文京区
15. 堀毛一也・堀毛裕子 『社会的逆境からの精神的回復・成長資源に関する研究(1) 調査の概要』 日本パーソナリティ心理学会第23回大会 2014年10月 山梨県甲府市 *1
16. 堀毛裕子・堀毛一也 『社会的逆境からの精神的回復・成長資源に関する研究(2)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

Sense of Coherence の視点から』 日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会
2014 年 10 月 山梨県甲府市 *2

17. 戸梶亜紀彦 『職場の文脈における動機づけと感情』 日本パーソナリティ心理学会第 23 回大会 広報委員会企画シンポジウム『感情と動機づけをめぐって』(話題提供) 2014 年 10 月 山梨県甲府市
18. 須田木綿子 『ニュー・ガバナンスの再帰的課題』 日本学術会議主催学術フォーラム『ニュー・ガバナンスの限界と社会的包摂』 日本学術会議社会学委員会・経済学委員会合同：包摂的社会政策に関する多角的検討分科会 2014 年 9 月 東京都千代田区
19. 戸梶亜紀彦 『動機づけ維持のためのレジリエンス向上に関する検討(2)ーレジリエンスを維持するメカニズムについてー』 日本認知科学会第 31 回大会 2014 年 9 月 愛知県名古屋市
20. 大坊郁夫 『共生のためのコミュニケーション力を高めるー対人社会心理学の視点からー』 産業・組織心理学会第 30 回全国大会 シンポジウム 『産業・組織心理学のアイデンティティ, 可能性 可能性, 社会的貢献: 他の心理学領域視点から』 (話題提供) 2014 年 9 月 北海道札幌市
21. 角山剛 『産業・組織心理学のアイデンティティ・可能性・社会的貢献: 他の心理学領域の視点から』 産業・組織心理学会第 30 回全国大会 シンポジウム (指定討論者) 2014 年 9 月 北海道札幌市
22. 前田具美・藤野紀子・松木敦志・松井豊 『職場への土産購入を規定する要因について』 産業・組織心理学会第 30 回全国大会 2014 年 9 月 北海道札幌市
23. 堀毛一也・安藤清志・大島尚・高橋幸子・愈善英 『社会的逆境からの回復に関する基礎調査ー(1)基礎概念と調査票の設計』 日本心理学会第 78 回大会 2014 年 9 月 京都府京都市 *3
24. 愈善英・高橋幸子・堀毛一也・安藤清志・大島尚 『社会的逆境からの回復に関する基礎調査ー(2)性差の検討』 日本心理学会第 78 回大会 2014 年 9 月 京都府京都市 *4
25. 福岡欣治 『友人のサポートと大学生のレポート課題への取り組みー知覚されたサポート、実行されたサポートの効果』 日本心理学会第 78 回大会 2014 年 9 月 京都府京都市
26. 高橋幸子・桑原裕子・松井豊 『被災自治体職員の被災 2 年 4 か月後のメンタルヘルス』 日本心理学会第 78 回大会 2014 年 9 月 京都府京都市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

27. 尾崎由佳・後藤崇志・小林麻衣・楠見孝 『接近的・回避的欲望に関する調査(3)：各欲望の遂行頻度と制御焦点・BIS/BASの関連』 日本心理学会第78回大会 2014年9月 京都府京都市
28. 大坊郁夫 『学校におけるリスク・マネジメント教育－必要か、可能か？－』 日本心理学会第78回大会 自主シンポジウム(指定討論) 2014年9月 京都府京都市
29. 西田公昭 『学校におけるリスク・マネジメント教育－必要か、可能か？－』 日本心理学会第78回大会 自主シンポジウム(話題提供) 2014年9月 京都府京都市
30. 久保ゆかり 『社会性とその発達—子どもの感情発達の視点から』 日本心理学会第78回大会 シンポジウム『社会性とその発達：ヒトの特徴と教育可能性を考える』(話題提供) 2014年9月 京都府京都市
31. 高橋尚也・安藤清志・福岡欣治・Rie Ju-Il・Yeon Goo-Cheong・松井豊・井上果子・畑中美穂 『韓国におけるジャーナリストの惨事ストレスの実態』 日本グループ・ダイナミクス学会第61回大会 2014年9月 東京都文京区
32. 池間愛梨・桐生正幸 『大阪府における子どもに対する性的前兆事案を誘発する環境要因の検討』 日本犯罪心理学会第52回大会 2014年9月 東京都新宿区
33. 桐生正幸 『悪質クレマーの検討』 日本犯罪心理学会第52回大会 2014年9月 東京都新宿区
34. 山本須美子 『中国系移民にみる学校適応・不適応－パリの学校でのフィールドワークから』 フランス教育学会第32回研究大会 シンポジウム『移民の子どもの教育政策と学校適応をめぐる問題』 2014年9月 東京都文京区
35. 福岡欣治・中村健壽・田中恵子 『医事課職員における上司および同僚のサポートとバーンアウト、患者・家族対応との関連性』 日本応用心理学会第81回大会 2014年8月 愛知県名古屋市
36. 田中恵子・中村健壽・福岡欣治 『医事課職員における職務ストレスとバーンアウト傾向—患者接遇への注目を背景として—』 日本医療秘書実務学会第5回全国大会 2014年8月 岡山県倉敷市
37. 藤原健・毛新華・木村昌紀・磯友輝子・大坊郁夫 『小集団の集団的知性に関する—考察—課題解決場面における発話の分散と性別の割合—』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

38. 福岡欣治 『友人からのネガティブサポートと失敗経験後の目標達成行動』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
39. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治 『自殺念慮と自殺の対人関係理論』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
40. 兪善英・松井豊・太刀川弘和・相羽美幸・遠藤剛・福岡欣治・土井永史・朝田隆 『一般成人の家族に対するストレス開示抑制態度と抑うつとの関連』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
41. 堀毛一也 『大震災後の心的成長と、サステイナブルな心性・行動および主観的well-beingの関連について』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
42. 松尾藍・松井豊 『日本における社会的ステレオタイプの実態とその分類』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
43. 小林麻衣子・白岩祐子・唐沢かおり・松井豊 『犯罪被害者遺族の視点から見た有用なサポート』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
44. 桑原裕子・高橋幸子・松井豊 『東日本大震災で被災した自治体職員のメンタルヘルスー2年4ヶ月後の継続調査からー』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
45. 戸梶亜紀彦 『動機づけ維持のためのレジリエンス向上に関する検討(1)』 日本社会心理学会第55回大会 2014年7月 北海道札幌市
46. Horike, K. “Revision of sustainable mind scale.” The 17th European Conference on Personality, Lausanne, Switzerland. (July, 2014).
47. Nisida, K. “What makes Japanese university students accept invitations to commit group antisocial acts?” The 28th International Congress of Applied Psychology, Paris, France. (July, 2014).
48. Takeya Mizuno (2014). “Press Freedom in the Enemy’s Language: Government Control of Japanese-Language Newspapers in Japanese American Camps during World War II,” Association for Education in Journalism and Mass Communication (AEJMC), National Convention, Montreal, Canada, August 7, 2014. (Acceptance Rate: 50.8%)
49. 桑原裕子・高橋幸子・松井豊 『東日本大震災による自治体職員の震災関連業務とメンタルヘルスー2年4ヶ月後の調査からー』 日本トラウマティック・スト

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

レス学会第13回大会 2014年5月 福島県福島市

50. 太刀川弘和・相羽美幸・遠藤剛・白鳥裕貴・福岡欣治・松井豊・朝田隆 『自殺念慮と対人関係—対人関係欲求質問票 (INQ-12) を用いた検討—』 日本社会精神医学会第33回大会 2014年3月 東京都千代田区
51. Suda, Y. “The changing relationships among government, nonprofit and for-profit human service organizations: The long-term care insurance system in Japan.” Voluntas conference: Changes in the mixed economy of welfare—Comparative perspectives, Copenhagen, Denmark. (March, 2014).
52. Fujiwara, K., & Daibo, I. “Automated method for extracting nonverbal behavior in dyadic conversation: Using a thin slice technique.” The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Austin, Texas, U.S.A. (February, 2014).
53. 水野剛也 『日系アメリカ人と／のマス・メディア、ジャーナリズム研究 「日本人」研究者が開拓すべき「広大な未踏地」』 メディア史研究会 2014年1月 東京都千代田区
54. 福岡欣治 『出産後の夫婦におけるサポート、愛情、抑うつとの相互関係—産後1ヶ月時点での夫婦ペア・データによる検討—』 岡山心理学会第61回大会 2013年12月 岡山県岡山市
55. 堀毛一也 『持続可能な well-being をどうめざすか』 日本応用心理学会シンポジウム2013 『Well-being の心理学—今、そしてこれからの well-being 研究の応用・実践』 (話題提供) 2013年12月 東京都足立区
56. 谷口尚子 『投票参加に関する実験的研究』 公共選択学会第17回大会 2013年11月 東京都世田谷区
57. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治・朝田隆 『自殺とソーシャル・キャピタルとの関連』 日本社会心理学会第54回大会 2013年11月 沖縄県宜野湾市
58. 飛田操・水田恵三・安藤清志・渡辺浪二・佐藤史緒・堀毛一也・堀毛裕子・結城裕也 『複合災害がもたらした「喪失」: 浪江町民への面接調査から』 日本社会心理学会第54回大会 2013年11月 沖縄県宜野湾市
59. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成 (11) —周囲からの扱い、サポート、自己の達成に関連する事項の検討—』 日本社会心理学会第54回大会 2013年11月 沖縄県宜野湾市

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

60. Suda, Y. “From increasing similarity to a new organizational form: Nonprofit and for-profit human service organizations.” The Annual Conference of the Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action, Hartford, Connecticut, U.S.A. (November, 2013)
61. Suda, Y. “Caring aging population and its trickling effects: Experience of Japan. Global aging: Rising challenges and a quest for opportunities.” UNESCO Chair in Education & Technology for Social Change, Barcelona, Spain. (November, 2013).
62. 須田木綿子 『非営利—営利サービス供給組織の差異の縮小と「非」社会的企業組織の生成』 社会政策学会第 127 回（秋期）大会 テーマ別分科会「介護と社会組織：台湾—日本の共同研究から」 2013 年 10 月 大阪府大阪市
63. 西田公昭 『カルトとマインド・コントロール —well-being を阻害するもの—』モチベーション研究所第 2 回フォーラム ～Well-being をめざし明日へのモチベーションを育むために～ 2013 年 10 月 東京都足立区
64. 相羽美幸・太刀川弘和・松井豊・福岡欣治 『ソーシャル・サポート・ネットワークと抑うつとの関連—地域別・年代別・性別の検討—』 日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
65. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成（10）—評価・承認に関連する事項の検討—』 日本心理学会第 77 回大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
66. 三村覚・谷釜了正・川本利恵子・角山剛・西條修光・藤田主一 『体罰を考える』日本応用心理学会第 80 回記念大会 2013 年 9 月 東京都世田谷区
67. 谷口尚子 『投票参加に関する実証研究—若者の投票参加を中心として—』 日本政治学会大会 2013 年度研究大会 2013 年 9 月 北海道札幌市
68. 戸梶亜紀彦 『動機づけ向上のためのシナリオ作成（9）—職場内での評価・承認の効果に関する内容分析—』 日本認知科学会第 30 回大会 2013 年 9 月 東京都町田市
69. Horike, K. “Some influences of the Higashi-Nihon earthquake on the inhabitants’ well-being” The 10th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology, Yogyakarta, Indonesia. (August, 2013).
70. Fukuoka, Y. “Great East Japan Earthquake and Critical Incident Stress of Journalists.” Oral Presentation in the Symposium "Tri-National Symposium on 'Disaster and Psychology'" at the 2013 Annual Conference of the Korean

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

Psychological Association, Daejeon, Korea (August, 2013).

71. 堀毛一也 『東日本大震災が主観的 well-being に与えた影響について』 日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会 2013 年 7 月 北海道札幌市
72. 戸梶亜紀彦 『社会心理学系大学教育の未来を探る』(ワークショップ: 話題提供者) 日本グループ・ダイナミクス学会第 60 回大会 2013 年 7 月 北海道札幌市
73. Nishida, K. “Inducing violent attack by cult psychological manipulation: What is ABCD & H?” Annual International Conference of International Cultic Studies Association, Trieste, Italy. (July, 2013).
74. 須田木綿子 『福祉社会学の到達点と課題』 福祉社会学会第 11 回大会 2013 年 6 月 京都府京都市
75. Horike, K. “Towards the psychology for the sustainable well-being.” The 13th International Symposium on the Contributions of Psychology to Peace, Kuala Lumpur, Malaysia (June, 2013).
76. 堀毛一也 『モチベーションはポジティブな人生を築く』 日本社会心理学会第 57 回シンポジウム (指定討論) 2013 年 5 月 東京都足立区
77. 戸梶亜紀彦 『感動体験を応用したワークモチベーションの効果的向上について』 (公開シンポジウム) 日本社会心理学会第 57 回公開シンポジウム (話題提供) 2013 年 5 月 東京都足立区
78. 谷口尚子・クリス・ウィンクラー 『国際比較・時系列比較可能な政策コーディング法とその応用』 日本選挙学会 2013 年度研究大会 2013 年 5 月 京都府京都市
79. 福岡欣治 『ジャーナリストにおける惨事ストレス対策 — 東日本大震災をふまえて —』 日本トラウマティック・ストレス学会第 12 回大会 シンポジウム (話題提供) 『災害や事件におけるメディアの役割: トラウマ学の視点から考える』 2013 年 5 月 東京都豊島区
80. 戸梶亜紀彦 『感謝の対象に関する検討』 日本感情心理学会第 21 回大会 2013 年 5 月 宮城県仙台市
81. 堀毛一也・安藤清志・大島 尚・高橋幸子 社会的逆境からの個人的・社会的回復資源 (1) 家庭内不和と介護・看護体験からの回復資源の比較 日本社会心理学会第 59 回大会 2015 年 10 月 東京女子大学 *5

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

82.高橋幸子・安藤清志・大島 尚・堀毛一也 社会的逆境からの回復に関する基礎調査 (3) 社会的逆境の分類 日本社会心理学会第 59 回大会 2015 年 10 月 東京女子大学 *6

<研究成果の公開状況>(上記以外)

シンポジウム・学会等の実施状況、インターネットでの公開状況等ホームページで公開している場合には、URL を記載してください。

<既実施しているもの>

1. シンポジウム・学会等

1) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター (HIRC21), 日仏政治学会共催 シンポジウム

日時：2016 年 2 月 16 日 (火) 16 時～18 時

場所：東洋大学白山キャンパス 6102 教室

プログラム：『ヨーロッパのレジリエンスー歴史・現在一』

講演者：

1. Sylvain Schirmann (ストラスブール大学政治学院)

2. Jay Rowell (ストラスブール大学・フランス国立科学研究センター)

討論者：川嶋周一 (明治大学)

<http://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/91575.html>

2) 東洋大学 21 世紀ヒューマン・インタラクシオン・リサーチ・センター (HIRC21) 主催 シンポジウム *12

日時：2016 年 2 月 18 日 (木) 14 時～17 時

場所：東洋大学白山キャンパス 6102 教室

プログラム：『分断から統合へーストラスブールとフクシマ』

講演者：

1. 鈴木 規子 (東洋大学社会学部)

2. Sylvain Schirmann (ストラスブール大学政治学院)

3. Jay Rowell (ストラスブール大学・フランス国立科学研究センター)

4. 安藤 清志 (東洋大学社会学部)

5. 菅野 圭祐 (早稲田大学理工学術院)

司会・討論者：大島 尚 (東洋大学社会学部)

<http://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/91559.html>

3) 日本脱カルト協会&東洋大学 HIRC21 共催 招待講演 *14

日時：2015 年 8 月 29 日 (土) 13:00-17:30

場所：立正大学品川キャンパス 11 号館

プログラム：カルト問題の今後 自由と人権の未来は？

・講演者 元信者の抱える問題 岩野孝之

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

- ・ 講演者 カルト信者の家族の苦悩 発表者未定
- ・ 講演者 信者および家族へのカウンセリングの展開と課題 平野学
- ・ 講演者 カルト予防対策と市民意識高揚の課題 山口貴士
- ・ 講演者 Ms. Catherine Picard フランスのカルト対策：発展と課題：基調講演

<https://www.toyo.ac.jp/site/hirc21/79611.html>

4) 翰林大学(韓国) & 東洋大学 HIRC21 第5回日韓共同セミナー

日時：2014年12月20日

場所：東洋大学白山キャンパス6号館2階 6202室

プログラム：

講演1 13:10~14:00 Rie, Ju-Il [李 柱一] (翰林大学)

「アクティブエイジングと韓国高齢者の QOL の関係—翰林大学の取り組み」
“Research in Hallym University on the Relationship between Active Ageing and Korean Elderly’s Quality of Life”

講演2 14:00~14:50 Choi, Hoon [崔 縵] (翰林大学)

「アクティブエイジングに向けた社会生活の手段としてのコンピュータゲーム」
“Computer Games as a Way of a Social Life for Active Ageing”

講演3 15:30~16:20 桐生正幸 Masayuki Kiriu (東洋大学)

「日本の高齢者を取り巻く犯罪事情」 “Japanese elderly citizens as victims and perpetrators of crimes.”

講演4 16:20~17:10 安藤清志/堀毛一也 Kiyoshi Ando / Kazuya Horike (東洋大学)

「東日本大震災高齢避難者のウエルビーイング」 “Psychological well-being of the aged evacuees in Fukushima”

大学院生ポスター発表

Hong, Rak-Kyeun (洪 榮均)

「注意の瞬きは知覚能力と注意能力いずれの改善によって除去されるか？」 “Is removal of attentional blink induced by improvements of perceptual capacity or attentional capacity?”

Lim, Solah (イム ソラ)

「プロアクティブな性格とプロテウスのキャリア志向がアクティブエイジングに及ぼす影響」 “Effects of proactive personality and protean career orientation on active aging”

金子迪大 Michihiro Kaneko

「感情順応 / 持続過程の検討」 “Testing affective adaptation/lasting process”

新井田恵美 Emi Niida

「人の視線は男をだまらせる？ 男性の短期配偶と社会的評判の関係」
“Watchful eyes tame men?: The relationship between men’s short-term mating and social reputation.”

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

5) グループダイナミクス学会&東洋大学 HIRC21 共催 招待講演

【招待講演1】 第61回大会1日目(9月6日)13:45-15:15

It Takes Two Hands to Clap: Collectivistic Independence Promotes Group Creativity

講演者 Hoon-Seok Choi (Sungkyunkwan University, Republic of Korea)

【招待講演2】 第61回大会1日目(9月6日)16:00-17:30 *11

社会心理学と平和構築：大量虐殺後のルワンダにおける和解と癒しの試み

講演者 南 昌廣 (ブリティッシュコロンビア大学/PFR-森田平和和解研究所)

【招待講演3】 第61回大会2日目(9月7日) 10:00-11:30

On the Usefulness of Experience-Sampling for the Understanding of Self-control, Morality, and Power in Daily Life

講演者 Wilhelm Hofmann (University of Cologne)

6) グループダイナミクス学会&東洋大学 HIRC21 共催 日韓若手研究者インタラクションプログラム *8

【特別ワークショップ】 第61回大会2日目(9月7日)13:00-15:00

個人と集団のダイナミクス

話題提供者 Hyun Euh (成均館大学)

話題提供者 Jeong Gil Seo (成均館大学)

話題提供者 井上裕珠 (一橋大学)

話題提供者 鷹阪龍太 (東洋大学)

7) 災害救援者の惨事ストレスシンポジウム

日時：2014年1月12日(日) 13:30-16:40

場所：東洋大学 白山キャンパス 6号館 1階 6101 教室 (東京都文京区)

プログラム：

13:30-15:00 第1部 基調講演

「災害救援者・支援者のこころ：東日本大震災後の社会的課題」

講演者：重村 淳 (防衛医科大学校 精神科学講座)

15:10-16:40 第2部 科学研究費補助金による助成研究成果発表 消防職員の惨事ストレス

講演者：松井豊(筑波大学人間系)；研究全体説明

兪 善英(筑波大学人間総合科学研究科)；東日本大震災緊急消防援助隊調

査

Hyesun Joo (梨花女子大学校社会科学大学心理学科)；韓国消防職員調査

指定討論：重村 淳 (防衛医科大学校 精神科学講座)

8) 第4回東洋大学 HIRC21&翰林大学応用心理研究所共同セミナー

日時：2013年12月14日(土) 13:30~18:00

場所：翰林大学応用心理研究所

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

プログラム：

Session 1

Takashi Kakuyama (Tokyo Future University)

“The Activity of Japanese Association of Industrial and Organizational Psychology (JAIOP)”

Akihiko Tokaji (Toyo University)

“The interpersonal Factors Affecting the Motivation at Work”

Yeonwook Kang (Hallym University)

“Cognitive Ageing and Dementia”

Session 2

Takashi Ohshima (Toyo University)

“Volunteering in Social Dilemmas”

Hoon Choi (Hallym University)

“Long-Lasting Elimination of Attentional Blink Through Training”

Poster presentations & graduate students' interactions

(2 posters by Toyo University & 2 posters by Hallym University)

2. 講演会

1)

日時：2016年2月24日 *13

講師：黄昭淵（江原大学人文学部）

テーマ：「近代日本の文学者が経験した逆境、および小説に描かれた逆境—韓国人の立場から—」

企画：安藤清志（東洋大学）

2)

日時：2014年10月10日

講師：安藤清志

テーマ：原発被災の心理的影響—浪江町・県内避難住民の方々を対象にしたアンケート調査の結果から

企画：第4回 浪江町復興まちづくり協議会

3)

日時：2014年10月10日

講師：内田由紀子氏（京都大学・准教授）

テーマ：文化と幸福：ソーシャル・キャピタルとの関連

企画：堀毛一也

4)

日時：2014年2月22日

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

講師：安藤清志

テーマ：災害における「喪失」と社会 ～ill-being から well-being へ

企画：東京未来大学モチベーション研究所第3回フォーラム

3. 研究会

1) 成均館大学（韓国）&東洋大学 HIRC21 共同研究会 *9

日時：2015年9月25日-28日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

日時：2015年5月22日-25日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

日時：2016年3月13日-16日

テーマ：社会的逆境における感情表出と社会低排斥の日韓比較

企画：安藤清志（東洋大学） 崔訓碩（成均館大学校）

2) 東洋大学&HIRC21 共同研究会 *7

日時：2014年3月7日-11日

テーマ：韓国人における社会的逆境の種類や頻度、精神的回復の程度

企画：安藤清志（東洋大学） 李柱一（翰林大学）

3) 社会行動研究会&東洋大学 HIRC21 共催 研究会

【第175回】2016年2月22日（月）15:30-18:00

発表者1：竹橋洋毅（東京未来大学）

タイトル：「困難に挑む心の理学」

発表者2：小林麻衣（東洋大学）

タイトル：「自我消耗するとズルしやすいのか？－自我消耗が不正行為に及ぼす影響の検討－」

【第174回】2015年12月26日（土）15:00-17:30

発表者1：高史明（神奈川大学）

タイトル：「在日コリアンへのレイシズムとインターネット」

発表者2：田戸岡好香（東京大学）

タイトル：「専業主夫のイメージの検討：専業主婦およびキャリア男性との比較から」

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

【第173回】2015年10月24日(土)16:00-17:30

発表者：大久保暢俊(東洋大学人間科学総合研究所)

タイトル：社会的比較における第三者の影響

【第172回】2015年8月25日(火)15:00-17:30

発表者1：蔵永 瞳(就実短期大学)

タイトル：感謝されると親切になる？—感謝表出が受け手に及ぼす影響—

発表者2：田渕 恵(関西学院大学)

タイトル：「高齢者の知恵の伝授と若者の感謝—制御焦点理論を用いた実験的検討—

【第171回】2015年6月27日(土)16:00-17:30

発表者：八城 薫(大妻女子大学)

タイトル：大学生の余暇活動がwell-beingに及ぼす影響

【第170回】2015年4月25日(土)16:30-18:00

発表者：武田美亜(青山学院女子短期大学)

タイトル：親子間の透明性錯覚：娘と父母の関係をういた検討

【第169回】2月21日(土)15:00-18:00

「ユニークな名前は増加しているか？日本文化における個性追求と個人主義化」

発表者 荻原祐二(京都大学)

「文化の単位と心・文化の相互構成—地域住民の信頼に焦点を当てた社会調査—」

発表者 福島慎太郎(京都大学)

【第168回】12月12日(金)15:30-18:00

「霊長類における行動のプランニングおよび実行の神経メカニズム」

発表者 中山義久(公益財団法人東京都医学総合研究所 前頭葉機能プロジェクト)

「他者の感覚、情動を推測するミラーメカニズム」

発表者 石田裕昭(公益財団法人東京都医学総合研究所 前頭葉機能プロジェクト)

【第167回】10月25日(土)15:00-18:00

「自由意志信念の概念的フレームワーク」

発表者 渡辺 匠(東京大学)

「犯罪被害者のための正義：新しい司法制度の効果測定」

発表者 白岩祐子(東京大学)

「勢力感が人々の罰や許しの動機づけに与える影響」

発表者 橋本剛明 先生(東京大学)

【第166回】8月18日(月)11:00-18:00

「マルチレベルモデリング講習会」

発表者 清水裕士(広島大学大学院総合科学研究科 助教)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

【第165回】2014年8月8日(金) 15:00-18:00

「誰かのためにがんばる自分－他者志向性が課題への内発的動機づけに及ぼす影響」

発表者 村田光二(一橋大学)

「資源の分割容易性と分配への期待が妬みに及ぼす影響」

発表者 井上裕珠(一橋大学大学院)

【第164回】 2014年6月7日(土) 16:00-17:30

「日本における犯罪心理学の現在と今後」

発表者 桐生正幸(東洋大学)

【第163回】 2014年4月26日(土) 16:00-17:30

「自己高揚と自己卑下：モチベーション維持戦略という視点から」

発表者 尾崎由佳(東洋大学)

【第162回】 2014年2月28日(金) 16:00-17:30

「制度としての文化」

発表者 山岸俊男(東京大学)

<これから実施する予定のもの>

1) 31st International Congress of Psychology *15

July 24-29, 2016

Invited symposium “Job-Related Stress in Natural Disaster”

Organizer: Kiyoshi Ando (Toyo University)

Kako Inoue (Yokohama National University)

Speaker: Elana Newman (University of Tulsa)

Cait McMahon (Dart Centre Asia Pacific)

Hiroko Horike (Tohoku Gakuin University)

Naoya Takahashi (Rissho University)

2) 31st International Congress of Psychology *10

July 24-29, 2016

Thematic Symposium Session “Japan-Korea Young Scholar Symposium on Adversity: Similarities, Differences, and Synthesis”

Organizer: Ryuta Takawaki (Toyo University)

Speaker: Jung Soon Ryong (Sungkyunkwan University, Korea)

Jeong-Gil Seo (Sungkyunkwan University, Korea)

Young-Sun Yuk (Toyo University)

Michihiro Kaneko (Toyo University)

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

3) 日本パーソナリティ心理学会国際交流委員会, 東洋大学 HIRC21 共催シンポジウム

タイトル: Personality and Physical Health (パーソナリティと身体的健康)

司会者: 堀毛一也 (東洋大学)

講演者: Dr. Angelina Sutin (フロリダ州立大学)

発表者: 榊原良太 (東京大学大学院), 川本哲也 (東京大学大学院), 西田裕紀子 (国立研究開発法人国立長寿医療研究センター)

コメンテーター: Dr. Antonio Terracciano

14 その他の研究成果等

「12 研究発表の状況」で記述した論文、学会発表等以外の研究成果及び企業との連携実績があれば具体的に記入してください。また、上記11(4)に記載した研究成果に対応するものには*を付してください。

15 「選定時」に付された留意事項とそれへの対応

<「選定時」に付された留意事項>

特記事項なし

<「選定時」に付された留意事項への対応>

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

16 施設・装置・設備・研究費の支出状況(実績概要)

(千円)

年度・区分	支出額	内 訳						備考
		法人負担	私学助成	共同研究機関負担	受託研究等	寄付金	その他()	
平成25年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	12,600	7,690	4,910				
平成26年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	15,853	10,864	4,989				
平成27年度	施設	0						
	装置	0						
	設備	0						
	研究費	15,319	8,528	6,791				
総額	施設	0	0	0	0	0	0	
	装置	0	0	0	0	0	0	
	設備	0	0	0	0	0	0	
	研究費	43,772	27,082	16,690	0	0	0	
総計	43,772	27,082	16,690	0	0	0		

17 施設・装置・設備の整備状況(私学助成を受けたものはすべて記載してください。)

《施設》(私学助成を受けていないものも含め、使用している施設をすべて記載してください。)(千円)

施設の名 称	整備年度	研究施設面積	研究室等数	使用者数	事業経費	補助金額	補助主体
21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター	25	32㎡	1	23		0	0

※ 私学助成による補助事業として行った新增築により、整備前と比較して増加した面積

0 m²

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

《装置・設備》(私学助成を受けていないものは、主なもののみを記載してください。)

(千円)

装置・設備の名称	整備年度	型番	台数	稼働時間数	事業経費	補助金額	補助主体
(研究装置)				h			
				h			
				h			
				h			
(研究設備)				h			
				h			
				h			
				h			
(情報処理関係設備)				h			
				h			
				h			
				h			

18 研究費の支出状況

(千円)

年 度	平成 25 年度		
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳	
		主 な 使 途	金 額
教 育 研 究 経 費 支 出			
消 耗 品 費	1,083	研究資料複写、消耗品	1,083
図書資料費	301	書籍代	301
会合費	41	シンポジウムに伴う経費	41
通信運搬費	27	郵送、宅配便	27
印刷製本費	362	印刷・製本	362
旅費交通費	2,935	海外旅費・国内旅費	2,935
報酬・委託料	4,900	業務委託・依頼による支払	4,900
(その他)	258	学会参加費	258
計	9,907		9,907
ア ル バ イ ト 関 係 支 出			
人件費支出 (兼務職員)	196	研究・センター運営補助	196
教育研究経費支出			
計	196		196
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)			
教育研究用機器備品	1,320	教育研究用機器備品費	1,320
図 書			
計	1,320		1,320
研 究 ス タ ッ プ 関 係 支 出			
リサーチ・アシスタント	529	研究補助	529
ポスト・ドクター	648	研究補助	648
研究支援推進経費			
計	1,177		1,177

法人番号	131070
プロジェクト番号	S1391005

年 度	平成 26 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	997	研究資料複写、消耗品	997	OA用品、複写料等
図 書 資 料 費	566	書籍代	566	研究関連書籍・資料
会 合 費	155	シンポジウムに伴う経費	155	弁当、お茶、シンポジウム懇親会
通 信 運 搬 費	18	郵送、宅配便	18	資料発送(切手、レターパック、ヤマト便)
印 刷 製 本 費	1,148	印刷・製本	1,148	研究年報等作成
旅 費 交 通 費	3,849	海外旅費・国内旅費	3,849	調査・研究・学会参加、海外研究者招聘
報 酬 ・ 委 託 料 (その他)	6,471	業務委託・依頼による支払	6,471	web調査業務委託、通訳・翻訳、講演謝金
	156	学会参加費	156	学会参加費
計	13,360		13,360	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)	563	研究補助等	563	時給900円、年間時間数約626時間 実人数 6人
教育研究経費支出 計	563		563	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品 図 書	446	教育研究用機器備品費	446	スキャナ
計	446		446	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	130	研究補助	130	学内1人(内外国人1人)
ポスト・ドクター	1,354	研究補助	1,354	学外1人、外国1人
研究支援推進経費 計	1,484		1,484	学内1人(内外国人1人)、学外1人、外国1人

年 度	平成 27 年度			
小 科 目	支 出 額	積 算 内 訳		
		主 な 使 途	金 額	主 な 内 容
教 育 研 究 経 費 支 出				
消 耗 品 費	687	研究資料複写、消耗品	687	OA用品、複写料等
図 書 資 料 費	722	書籍代	722	研究関連書籍・資料
会 合 費	198	シンポジウムに伴う経費	198	弁当、お茶、シンポジウム懇親会
通 信 運 搬 費	103	郵送、宅配便	103	年報・資料発送(切手、レターパック、ヤマト便)
印 刷 製 本 費	367	印刷・製本	367	研究年報等作成
旅 費 交 通 費	2,778	海外旅費・国内旅費	2,778	調査・研究・学会参加、海外研究者招聘
報 酬 ・ 委 託 料 (その他)	3,064	業務委託・依頼による支払	3,064	web調査業務委託、通訳・翻訳、講演謝金
	95	学会参加費	95	学会参加費、データ利用料
計	8,014		8,014	
ア ル バ イ ト 関 係 支 出				
人 件 費 支 出 (兼務職員)	1,090	研究補助等	1,090	時給 920円、年間時間数1184時間 実人数14人
教育研究経費支出 計	1,090		1,090	
設 備 関 係 支 出(1個又は1組の価格が500万円未満のもの)				
教育研究用機器備品 図 書	3,132	教育研究機器備品費	3,132	光イメージング脳機能測定装置、大判プリンタ
計	3,132		3,132	
研 究 ス タ ッ フ 関 係 支 出				
リサーチ・アシスタント	2,192	研究補助	2,192	学内3人
ポスト・ドクター	891	研究補助	891	学外1人
研究支援推進経費 計	3,083		3,083	学内3人、学外1人